

人間生態系での対話的観測論

渋谷仙吉 人間自然学研究所

§ 1 はじめに 環境論と生態系生命

人間科学では、一人称的「理解」と三人称的「説明」とのあいだに研究方法的な裂け目が内在している。我々はこの裂け目を融合するために二人称的立場からブランコ共振現象をモデル化し、自己と他者との対話を媒介として自他の共感的理解・共鳴認識に基づいて対話的観測方法を提案した（文献1）。J.ユクスキュルは、各々の動物がそれぞれの感覚的知覚に基づいて固有の生活環境を持っているとして1934年、それぞれの動物は固有の環世界(Umwelt)を形成しているという主体的環境論を提案しており、仏教の環境論と類似している。仏教は成立当初から人間生命と生活環境の相互依存に注目し人間と自然が密接に関連しながら重層的な環境構造を形成しているとして生命論と環境論を融合した総合的な生命観境論を展開している（文献2）。

人間生態系は人間とその環境が形成しているシステムなので、人間も系に含まれており系外から観測、認識できないので従来のカメラモデルの知覚論と見合う形で、外的対象—心的内容—意識作用の三要素による認識・観測論は、広松も指摘しているように破綻して使えない。また、対象が自然・環境なので人間科学での対話的観測方法もつかえない。そこで、アリストテレスの形式論理のように物事が独存していることを前提とする思考原理ではなく、仏法の縁起論に基づく縁起律を導入し環境と人間が相互依存し、双方が対等の応答機能を具えているとすると、主客が相互に作用しあい、逆転可能ともなり共鳴認識して対話的観測が成立することを示す。人間生態系では、人間が環境主体となっている人間生態系生命が生きずいており（文献3）、環境主体の人間が環境・自然とのコミュニケーションの交換すなわち対話がなされることになる。人間生態系生命を客観視すれば環境主体の生活と考えられるので、人間生態系での観測は環境主体である人間の生活を観測することになる。

§ 2 人間生態系：縁起律と環境の能動的機能

1952年、生物と環境は一体となって一つ生態系を構成している環境観がW.D.Billingsによって提案された。主体あつての環境という認識は、「主体-環境系」の生命概念に発展し、細胞を生命の単位とする従来の生命の定義を拡張する必要を示唆している。生物にとって環境とは、その生物が認識しうるものである。環境から環境主体への作用は環境作用と呼び、逆に環境主体から環境への作用は環境形成作用と呼ばれるので、環境も環境主体と同様に潜在的に能動性を具備していることを意味している。

人間生態系では、認識する人間が認識される環境に含まれ共に流動的であり、「動きつつあるもの」として認識しなければならず人間生態系生命を認識することになる。

西欧的認識方法によれば、生態系を形成している環境を認識し観測するために観測者はそ

の環境の外部から客観的に認識することになるので、環境主体と別に観測者を立てることになる。しかし、この認識構造では無限後退論理となるので破綻して使えない。

生態系では、主体が能動的に環境形成作用する場合だけでなく、環境も能動的になり環境主体に作用するので、主体と環境の機能が逆転可能でなければならない。この主客逆転を理論的に解決するために、すべての物事が相互に依存しており独存できないという縁起律を導入すると、環境は受動的であるだけでなく、条件により環境主体と同等に能動的機能を具え、二人称的対話が可能となる。この縁起律は、経済危機を乗り越える経済学の思推論理として難波田が導入した相互律（文献4）を含む非線形的思考原理である。

§ 3 人間生態系での対話的観測

縁起律に基づくと環境は六境（色境・声境・香境・味境・触境・法境）だけでなく、環境主体として六根（眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根）を具えているとみなされる。それで環境主体の六根が環境の六境に縁して共鳴し、六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）が共鳴認識として得られるので仏法の認識論が人間生態系に適応可能になるので対話的観測も成立すると考えられる。以下、人間科学での対話的観測方法（文献1）に沿って、人間生態系での対話的観測の基本的例を述べる。

観境主体・観測者と観境・庭の畑の相互依存系を人間生態系のモデルとする。観測者が庭の畑に花の苗を植えると庭は美しくなり、観測者に好感をあたえる。それで観測者はさらに肥料を施すと花は大きく色鮮やかになり、庭が観測者に活力をあたえて仕事をやる気を促す。さらに観測者が雑草を取り手入れすると花は実を結び……。このような観境主体と観境との相互の働きかけ作業・生活（対話）を観測することにより、その人間生態系生命はより良く向上しようとの境涯にあることを確かめ、認知できる。

§ 4 まとめ

人間生態系では、環境主体は人間であり、その環境は他者・動物と草木国土・自然を含んでいるが相互にダイナミックに作用しあって人間生態系生命を形成している。そして人間とその環境が相互依存し縁起律に基づいて対等な認識機能を具えていると考える。すると、主体・人間と客体・環境が二人称的に相互に機能を逆転して情報を交換・対話し、コミュニケーション的に共鳴認識した物事を人間生態系生命の観測事とする人間生態系における対話的観測が成立する。

参考文献

1. 渋谷仙吉：人間科学における対話的観測方法、山形大学紀要（人文科学）, vol.15, no. 4, p.215-p.229, 2005年.
2. 渋谷仙吉・渋谷幸一：ユクスキュル環境論と仏教的環境論の比較考察、地球システム倫理学会会報、vol.3, p.87 - p.101, 2008年.
3. 渋谷仙吉：草木塔の思想とガイア仮説の比較考察、地球システム倫理学会会報、No.6, p.34 - p.39, 2011年.
4. 難波田春夫：経済危機、経済往来社、1976年.